

第 19 回 大賞(金賞)受賞作品

# 「普通じゃない」

徳島県立富岡東高等学校三年 藤川 諒子



賢治のまちから  
全国高校生★童話大賞



大賞〈金賞〉

『普通じゃない』

徳島県立富岡東高等学校三年 藤川 諒子

「もう、オレは学校に行けない」

その声には切実な響きがあった。

はっとして隣を見ると、物心ついた頃からの幼なじみの顔は今まで見たことがないほど暗く沈んでいた。

いつもと同じ、学校からの帰り道。同学年で固まって帰る中、一人また一人と「また明日ね」と手を振り、消える。最後に残るのは家が同じ住宅街にあるぼくと正史<sup>まさし</sup>だけだ。

そして、二人つきりになったとたんに正史が深刻に<sup>こっぴや</sup>呟いたのだった。学校に行けない、と。

思い返せば、今日正史は帰り道で一言も発していなかったような気がする。いつもは先頭に立ってヒツキムシで戦争ごっこを始めたたり、タンポポ笛をピーピー吹きならしたり、一度なんかは用水路をカメが泳いでると言っで落っこちて靴をびしょびしょにしたことだってある。そんな正史が大人しくしているなんてすんごく変だ、ということにぼくは今さら気づいた。

「なんで？　なんかあった？」

「……」

「あ、もしかしてあれ？　先生に今日ちょっと怒られたからとか……」

「ちがう」

「じゃあ……、あ、給食があんまりおいしくないからとか」

「ちがう」

「じゃあ……、なに？」

ぼくはもうなんにも思い付かなかった。正史はよくなんかやらかして先生に怒られたりはしてたけど、いつもそんなの気にしてないみたいで楽しそうだったから。正史が学校に行けないなんて言うのは、ぼくにはちょっと信じられなかった。



「……なあ」

「なに？」

「……」

正史はやっと何か言いかけたのかと思ったら、また黙ってしまった。いつもは余計なことまでしゃべってるのに、今日はやたらと口が重そうだ。

代わりにぼくがしゃべった方がいいのかな、とも思ったけど、ぼくはそんなにしゃべりたいこともなかったし、第一ぼくがしゃべりだしたら正史はもう家までだんまりを続けるんじゃないかって気がしたから、ぼくはじっと正史の言葉を待っていた。

「……オレさあ」

しばらくして、正史はそれだけ言った。でもまた黙ってしまふ。それでもぼくはしんぼう強く待ち続けた。

もう家が見えてきた辺りになってようやく正史は言った。

「……なんか、かぜおこせるようになったみたいでさ」

沈黙。

「は？ かぜ？ ……風邪、ひいたの？」

「ちがうって、風を起こせるんだよ」

横を見たけど、ふいっと目をそらされた。でも、体の前で両手を振り子みたいにぶうんと振るジェスチャーのおかげで、正史の言う「かぜ」が「風」であることは伝わった。——いや、でも風？ 風を起こせるってなんだ？

「今日さ、テストん時にオレのテスト、風で飛ばされたじゃん。窓も開いてないのに、周りのヤツのも飛んでったじゃん」

「うん」

確かにあった。正史の辺りの席だけ風でテストが飛ばされて、先生が拾い集めていた。窓が閉まってたから、みんなちょっと騒いでいて、先生も首をかしげていた。

「あれ、オレがしたんだよ」

ぼくは正史と机をはさんで向かい合って正座していた。自分の家と同じくらい慣れた正史の家のリビング。いつもはテレビを見るか、ゲームをするか



だから、こんなふうに真っ正面から向き合って座ることなんてめったにない。

そして、机の上には鉛筆が一本。

それを正史が緊張した面持ちで、何か大切なものを扱うようにそつと手に取った。一度深呼吸をしてから構える。ぼくもそれを息を詰めて見つめていた。

「じゃあ、いくぞ」

ぼくがうなずいたのを確認してから、正史はちよいと指を操った。同時に、鉛筆がぐるりと一回転した。

瞬間——、風が起きた。ぼくと正史の髪がなびき、服がはためいた。後ろでバサバサと音を立てるものに振り返ると、お手紙ボックスの中の手紙類が踊っていた。一番上の一枚がぶわっと舞った。その一枚の紙の動きがちょっと普通じゃあない。

ぼくらの周りをぐるりぐるりと巡っているのだ。理科の授業で習った人工衛星みたいだと思った。ぼくらを——いや、正確には正史を軸にして紙が宙を舞っている。

やがて風は収まり、紙は床に落ちた。正史は無言で立ち上がり、それを拾い上げると元の通りお手紙ボックスの紙の束に重ねて、乱れた束をとんとんと合わせた。

ぼくは自分の目で見てもまだ信じられなかった。座り直した正史に、ぼくは困惑と興味の入り交じった微妙な笑顔で尋ねた。

「ねえ、正史。これなに？」

「だからオレにもわかんねえって」

こうして正史が実演してくれる前に、一応話を聞いていた。とても信じがたい話を。

いわく——

正史のペン回しによって風が起きる。

クラスにペン回しのうまいヤツがいて、正史はそれに憧れて練習していた。実はぼくも練習しているけれどまだできない。ちよつとばかりコツがいるらしい。



正史が先にできるようになって、ぼくは一週間くらい前に自慢を受けた。それから正史はしょっちゅうペン回しをしていた。そんなにペン回しをしてどうするんだと聞きたくなるくらい、それはもうしょっちゅうだ。ペン回しを極めたところまわで何にもなれやしないのに。――と思っていたのだが、正史は何かになってしまったらしい。

「もう学校には行けないよ」

正史にしては珍しい気弱な声でぽつりと言った。視線も机の上に落ちていて、目が合わない。

「なんで？ 学校は行けるでしょ」

「行けないだろ。だってバレたらどうするんだよ」

「ペン回ししなけりゃいいじゃんか」

「もうクセんなってるから、無意識でしちゃうんだよ」

「そんなの……」

ぼくは言葉を失った。

本当に正史はもう学校に行かないのだろうか？ 今までずっと一緒だった幼なじみがない学校というのは、想像しただけでも味気ないものと思われた。正史がいない学校なんて、きっと静かで退屈な、この世で最もつまらない場所だろう！

「ねえ、その風って今日いきなり出たの？」

「ああ、テストの時に急にさ。今まで全然だったのに」

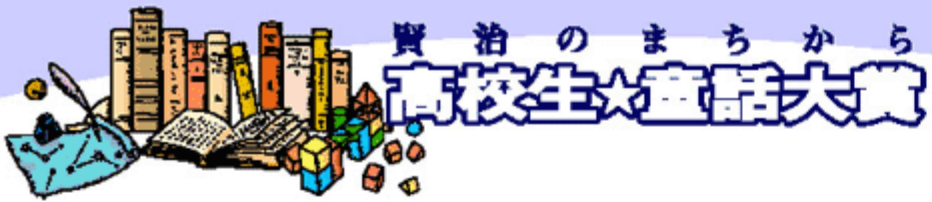
「じゃあさ、明日になったらもうなくなってるかもよ」

「……そうだといいな」

その後も、ああだこうだと色々話したけれど、原因も何もわからないからどうしようもない。でも、今日が金曜日だったのは運が良かった。とりあえず明日学校に行くか行かないか、という問題については考えなくて済む。ひとまず、明日の朝また正史の家に来るといふ約束をして、ぼくはほんの数メートル離れた自分の家に帰った。

次の朝、もう一度正史はペン回しをしたけれど、やっぱり風が巻き起こった。正史の両親は共働きで昨日ぼくがいたときにはまだ帰っていなかったけれど、今日は正史のお母さんがいたから、バレないように今度は正史の部屋





でくるりとした。正史のごちゃごちゃした部屋がさらにごちゃごちゃになった。

また次の朝、つまり日曜日。また正史の部屋で鉛筆をくるり。やっぱり風が起こった。しかもなんだかだんだんその強さが増していつている気がする。今度は物を全部部屋の隅っこに追いやっていたから、部屋は荒れなかった。

そして、月曜日。もはや驚きは皆無<sup>かいむ</sup>。ペン回しの風が吹き荒れた。でもぼくは、学校に行かないと言い張る正史を無理やり学校に引っ張っていった。ぼくだって、なにも考えずにこの週末を過ごしていたわけではない。どうにか解決策を見つけようと頭を働かせていた。そして考え出した策が一つ。これは根本的な解決にはならないけれど、結構な名案だとぼくは思う。

朝の学活が始まる前に、ぼくは正史に秘密兵器を渡した。受け取った正史は何も言わなかったけれど、顔でわかる。踏んづけられたカエルみたいな顔。「げえっ」って感じた。明らかにイヤそうだ。

ぼくが渡したのは「えんぴつくん」。鉛筆を正しく持ったための道具だ。低学年の時は皆鉛筆に装着していた。正式な名前は知らないけれど、一年生のときからえんぴつくんと呼んでいるから、ぼくらの間では通じる。

「えんぴつくん付けとけばペン回しできないんじゃないかと思って、探したんだ」

「こんなの付けられるか！ ガキじゃあるまいし」

「そんなこと言っちゃってしょうがないじゃん。別に誰に見せるわけでもないんだし、授業中だけでも付けときなよ」

「いらねえ！ 帰る！」

ガタンと勢いよく立ち上がり、ランドセルをひつつかんで教室から出て行くこうとする正史をぼくは追う。

「ちょっと待って！」

「待ちなさい！」



## 賢治のまちから 高校生★生活大賞

ナイスタイミング。担任のクモ先生が教室にやって来た。本当は南雲先生なぐもだけど、手足がクモみたいに長くてひよろいからみんなクモ先生って呼んでいる。もちろん本人の前では言わないけど。

「南雲先生！」

ぼくは先生の登場にほっとした。これで正史を止められる。

「正史くん、朝の学活が始まりますよ。みんなも。席について」

「なんだよクモ！ オレは帰るんだ！」

先生の目の前でクモなんて堂々と言う正史にぼくは焦あせったけれど、先生はそこはスルーしてくれた。

「正史くん、何かあったんですか？」

こう聞かれて正史に答えられるはずがない。「何か」はあった。でも言えない。

「……別に、なんも」

「じゃあ席に着いて。まずは朝のあいさつですよ」

おはようございます、とみんなで声を合わせた。正史はむっつりと口をつぐんでいたけれど、それ以上抵抗おとなせず大人しく席に着いた。

結局、一日正史はえんぴつくんを使わなかった。ただ、鉛筆も握らなかった。筆箱をランドセルにしまったまま、授業をぼんやり聞いていた。クモ先生は何度か注意したけれど、てんで言うことを聞かなかった。

次の日、正史は学校には来たけれど、やっぱり鉛筆を握らなかった。でも、さすがに先生に怒られて、二時間目からはしぶしぶノートをとっていた。ペン回しはどうかせずに耐えたみたいで、何も起こらなかった。

しかし、その次の日、水曜日に事件は起こる。

社会の時間、とうとう正史はペン回しをしてしまったのだ。くるりと一回転した鉛筆とともに、風がぶおんと巻き起こった。

ああ、やってしまった。正史はもう学校に来られない。

やっぱり学校に無理やり連れてこなきゃ良かったかな。ちらりとそんなことも思った。でも、正史が大人しくあのえんぴつくんを使っていれば、きっ



# 賢治のまちから 高校生★電話大賞

とこんなことにはならなかったんだ。正史に突き返されてぼくの筆箱の中にあるえんぴつくんを恨みがましく見つめてみたけれど、教室で風が吹き荒れているという事実は変わらない。

ようやく風が収まって、みんなのプリントが散らかった教室内を見回すと、みんなぼかんとしていた。正史だけが唇を噛み締めてうつぶいていた。ぼくはどうにかごまかそうと必死でしゃべった。

「うわあ、びっくりした。急にすごい風だったね」

ぼくは言うことなんか誰も聞いていやしない。みんな正史を見ている。そりゃそうだ。風を中心に正史はいたんだから。

でもぼくはしゃべり続けた。

「ほら、プリント拾おうよ。みんなのプリント飛んでっちゃったよ」

ぼくの努力もむなしく、クラスの女子の安田やすだが口を開いた。

「今の……、正史くんがやったの？」

正史は嘘うそをつかなかった。

ただ黙って、こくんとうなずいた。

ぼくはきつく目を閉じた。

ごめん、正史。正史の言うように学校には来ない方が良かったかもしれない。正史が風を起こせるってことが広まったら、どうなるだろう。国の機関とかが正史を連れて行っちゃうんだろうか？ 正史には会えなくなっちゃうんだろうか？ そんなのは、正史が学校にいないことよりもずっとイヤだ。

「実は……、わたしもなんだ」

安田の声に、ぼくは「へえっ？」と顔を上げた。正史を見ると、正史もぼかんとしている。

「あたしも」

「ぼくも」

「オレも」

教室内で口々に上がる声。ぼくは困惑していた。正史も目をまん丸くしてきよろきよろと教室を見回している。

「ど、どういうことだよ？ みんな風を起こせるのか？」

正史が聞くと、みんな「違う」と首を振った。





「じゃあ、どうということだよ」

「こういうこと」

みんなはそれぞれ顔を見合わせ、「せーの」と声をそろえた。

その途端とたん、教室内ではいろんなことが起こった。

最初に言い出した安田はパチンと指を鳴らした。するとポツと火が現れた。その一瞬後にピカッと強烈な光が瞬またたいた。それとほぼ同時に教室中の

机や椅子がガタガタ震え出した。ザアッと勢いよく水が落ちてきた。静電気みたいに体がピリツとした。いつの間にか木が一本教室の中に立っていた。

ぼくが気づいたことだけでこれだけのことが起こっていた。本当はもっといろんな事が起きていたんだろう。

ぼくは呆気あっけにとられてただ突っ立っていることしかできなかった。

同時に色んなことが起きた中に、きっと相性の悪いものもあったんだと思う。

教室の隅で悲鳴が上がった。見ると、机が燃えていた。かなり勢いが強くて、真っ赤なドレスを着た踊り子の凄まじいダンスみたいだった。火は見る間に勢いを増していく。みんな火とは反対の壁際かべぎわに集まっていた。空気が熱くなっていく。

「下がってなさい」

声が響いた。クモ先生だ。

言われなくてもみんな下がっている。先生は廊下に消火器を取りに行く気はなさそうだ。どうするのかと、みんな火に対峙たいじするクモ先生の動きを見守った。

急に気温が下がった気がした。

先生の背の向こうで踊っていたはずの火は消えていた——というより凍りこおついていた。火だけでなく、教室の隅は丸々氷におおわれていた。

ぼくって人間はすんごく普通だと思ってた。

幼なじみがちょっと（いや、かなりかな）やんちゃで、クラスでも目立つ方だったから余計にそう感じたのかもしれない。

でも僕が思ってた普通って、全然普通じゃなかったみたいだ。



だって、教室中で信じられないようなことが起きている。みんなが何か特別な力を持っている。この状況では一番普通じゃないのはむしろぼくかもしれない。

ぼくはなんだか怖くなって教室を飛び出した。廊下を走り抜けて、階段を一段飛ばしで駆け下りる。すぐ後ろを足音が追いかけてきている。

「おい！ 待てよ！」

正史の声が聞こえた。

ぼくは何から逃げているかもわからないまま、ただ、捕まるわけにはいかないと思って、必死で逃げた。でも正史は運動神経抜群で、ぼくはそうでもないから、ちよつとずつ足音が追ってくる。

あんまり焦って、ぼくはどうとう足を絡ませてしまった。階段で、勢いがついてたもんだから、体が宙に投げ出される。ぼくはきつく目をつむり、体を丸めて衝撃を待った。

しかし、衝撃は訪れなかった。

「おわっ！」

響いた叫び声はぼくのものではない。正史の声だ。ぼくは恐る恐る目を開けた。

目の前が真っ白く光っていた。蛍光灯だ。どうやら仰向けあおむでいるらしい。だが、背に床の硬さは感じられない。方向感覚を失いながらも、手を伸ばしてどうにか床に触れる。床は想定より少し下にあった。

ぼくは宙に浮いていた。床からほんの十センチ程度だが、このおかげでぼくは床に叩たたきつけられずにすんだようだ。

「いってえ。おい、そんなんでできるんなら言えよ」

声のした方を見ると、正史が肩の辺りを押さえて壁にもたれていた。落ちたぼくを持ち前の反射神経でかわしたものの、壁にぶつかったらしい。

「いや、ぼくもこんなの初めてだよ」

「大丈夫ですか！」

クモ先生が慌てて階段を駆け下りてきた。ながーい足で、なんと二段飛ばしだ。後からクラスメイトたちがぞろぞろと現れる。



賢治のまちから  
高校生☆童話大賞

ぼくはその見慣れた顔たちを眺めた。ちょっと今までとは違って見える気がする。

みんな普通じゃない。ぼくも普通じゃない。普通なんてどこにもない。「みんな変だ」

ぽつりと呟くと、ぼくはもう耐えられなくなって吹き出してしまった。ぼくらはみんな違ってると。

それが普通なのかもしれない。そう思った。